

## 第30回

### 革仕事の原点は西部劇 アメリカからスペインへ

保田芳文（革工房エル・パソ主宰、革作家）

平成27年6月20日



#### 革仕事の原点は西部劇 アメリカからスペインへ

早川 みなさま、こんにちは。今日は第30回名田庄多聞の会です。ようこそお越し下さいました。本日のテーマはそこに掲げてありますように、「革仕事の原点は西部劇 アメリカからスペインへ」ということで革作家の保田芳文さんに来ていただきました。自己紹介はご本人からということをお願いしてありますが、革細工の達人であると聞いています。保田さんにどうしてきていただいたかというところ、われわれ名田庄多聞の会には世話人が8人いますので、そこでテーマや講師の方を検討しているのですが、今日は世話人の一人の友人ということをお願いしました。はるばる名古屋の方から来ていただきました。それでは保田さん、よろしくお願いたします。

保田 みなさん、こんにちは。今日はわたしのようなどこの馬の骨か分からないようなもの話を聴きにきていただきましたありがとうございます。さきほどご紹介いただいたようにわたしの仕事は革のバッグの制作で、現在愛知県の半田市、人口は約十万人くらいですが、そこで革工房エル・パソを長男といっしょにやっています。作っているものとは異なりますと、ちよつと持ってきたのですが、これはショルダーバッグですが、一目でワイルドといえますか男性的なもので、これは鹿の角で留めるワイルドなリュックですね。このようなものを制作しています。これは一升瓶を入れるバッグです（ああと感嘆の声）。ベルト用の5ミリくらいの革でつくっていますので、どこかにぶつけても全然大丈夫です。このような

あまり高級感があふれるということのないようなものを得意として制作しています。今日は仕事の原点となりました、演目にありますように、わたしが幼少のころから大好きだった西部劇との関わりについてお話しさせていただきます。普段工房で黙って仕事をしているものですが、人としやべることがほとんどなくて、こういうところでしやべるといようなことはまずないものですから、お聞き苦しいところがあるかと思いますが、その辺はどうかご勘弁下さい。

## 西部劇、あんな風に勇敢に

こちらに今回呼んでいただいたというのは、いろいろご縁はあるのですが、わたしの母親はおおい町の川上の生まれなのです。叔父もまだ川上で絵を描いていますので、小さいころからこちらにはよく遊びに来ていました、原発ができる前から海で泳いだりして、この辺は非常に親しんでいました。母親は家の中ではずっと関西弁だったものですが、こちらに来るといつい若狭訛りの関西弁をしやべるようになります。今日はほんとに楽しみにしておりました。

母親は西部劇が好きだったのですね。どうして西部劇が好きなのか聞いたことがあったのですが、幼少期は舞鶴で過ごし、幼稚園が面白くなって抜け出して舞鶴港に海を見に行ったり、映画館に通っていたらしいのです。どうして映画館に入れるようになったのかと聞いたら、背が小さいものですから切符を切るカウンタからは見えなくてフ

リーパスだったというのですね。それでたくさん洋画を見て、その当時は娯楽映画といえば西部劇が多かったと思うのですね、それで西部劇をたくさん見ていたというのが母親の言葉です。母親は西部劇が好きだったのです。わたしは小さい頃、非常に気が小さくて、妹がいるのですが、例えば公園に遊びに行くとき、まず妹に偵察に行ってもらって誰も遊んでいなかったら初めて私が行く、そういう感じでした。自分でもその性格がいやだったのです。

そんなときにいつも母親が「西部劇の男を見てみ、あんな風に勇敢にならんと」とよく言われたのですね。小さい時はよく分からなかったのですが、中学校に入るくらいになって、母親が大きな画面でひとつ映画を見せてやると言って連れて行ってくれたのです。それがクリント・イーストウッド主演の「夕陽のガンマン」と「続夕陽のガンマン」でした。イーストウッドの出世作は「荒野の用心棒」で、三船敏郎の「用心棒」を盗作したということでした。話題になったのですが、それらは、その後の二作なのです。それを見に連れて行ってもらいまして、二本立てだと5時間以上あるのですが、全然退屈でなくて最初から最後まで本当に面白く、主人公のみならず出てくる男たちの、細かいことにこだわらないといいますが、荒々しいというか、なんとでも生きて行くのだという原始的な生命力のようなものを幼いながら感じて、こういう風に生きるのだということをお母さんが言っていたのかと分かりました。

## マカロニウエスタン

これは中学校一年のころですが、しばらくしてテレビでマカロニウエスタンをずっとやるようになったのです。マカロニウエスタンのことはごぞんじですね？いわゆる西部劇といっても二種類あつて、米国本土で作つてゐる正統派の西部劇、ハリウッド西部劇と、ヨーロッパ、特にイタリアを中心に、ドイツ、フランス、スペイン、イギリスなどで米国の西部の歴史を題材にして作つたマカロニウエスタンのふたつです。マカロニウエスタンは映画評論家のあの有名な淀川長治さんが命名したのです。世界的にはスパゲッティウエスタンです。マカロニウエスタンといつてゐるのは日本だけですが、マカロニウエスタンは世界的には通じます。父親は堅い人間だったので、マカロニウエスタンの音楽だけは評価する、すばらしい、だけど内容はめちゃくちゃだからあんなのは見ちゃいかんと言つていました。母親は、どこの国で作ろうが西部劇の言いたいことは一つだから、強いものへの憧れだから、どんな物でも見て吸収しろと。そう教えてくれました。

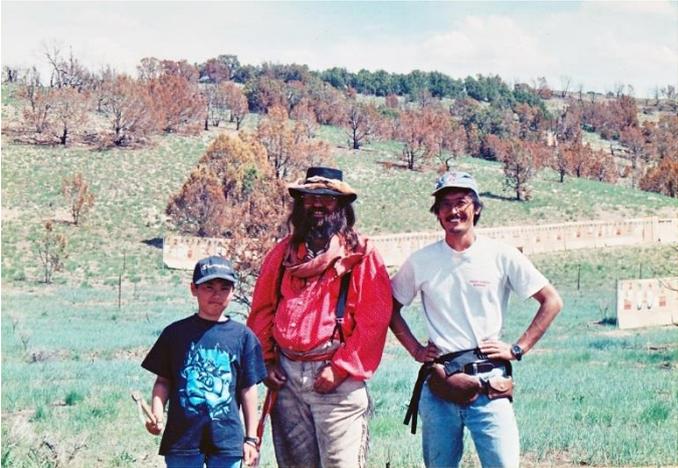
ですから、テレビでマカロニウエスタンのみならず西部劇は全部新聞で調べて、当時はビデオなどなかったので食い入るようになって見ました。カセットレコーダが普及し始めたところに、語学勉強用にといつて買つてもらつて、マカロニウエスタンや西部劇の音をすべて録音して、何回も何回も聞いてどのタイミングで音楽が始まつてどこで誰がどんな台詞を言うか、おそらく全部言えるまで聞いていたものです。

話はそれますが、その当時ためていたカセットテープは役に立つようなものでないと思つていたので、最近当時のマカロニウエスタンがDVDで出るようになりまして、そのときの特典として日本で放映された場合の吹き替え音源が収録されているのが多くなつたのですが、それが実は、テレビ会社は放映が終わるとその吹き替え音源を破棄するよゝなのですが、それでこのような活動をしているので、「あなた、その当時の音源を持っていますか」と問い合わせがあり、「もちろん持つていますよ」となり、それが世の中に出るといふなかば光栄なことになり、当時のカセットテープが生きるようになりました。

マカロニウエスタンは音楽の素晴らしさと単純に格好いいという、ただそれだけですが、アメリカの西部劇は詩情が豊かで風景もマカロニウエスタンとは比べものにならないくらい素晴らしいものです。ハリウッドウエスタンの中にはマウンテンマンと呼ばれる人たちがいます。それは保安官や騎兵隊やインディアンとは別で、アメリカに渡つたヨーロッパの人間が山に入つて、たとえばビーバーの毛皮を獲つて交易所に持ち込んで売買する、そういう人たちですが、彼らに憧れまして、現在作つてゐるものもその人たちのファッションや小物がヒントになつてゐるのですね。当時山に入った人たちというのはフランス人が多くて、マウンテンマンの人たちの専門用語があるのですが、それがすべてフランス語なのです。たとえば山に入つてゐる人たちが下界に下りてきて交易するのをランデブーと呼んでいたりします。

西部劇の中で、たとえば、デビークロケットという有名な人物がいま

すよね。いわゆるアメリカンネイティブの方と敵対するのではなくて、仲良くなつて何かをする、そういう姿に憧れまして、これはなんとしても一度アメリカに行つてみなければだめだと、空気を吸わなければだめだと、実際のアメリカの西部の男たちに会つて、景色を見て空気を吸えばもつと大きな人間になれるのではないかと確信しまして、私この仕事に就いたのが36歳のときですが、それまで10年くらいは身体障害者の施設で働いていて、その間も革細工の仕事をしています、退職と同時に退職金を使って米国に渡りました。



## アメリカへ

”渡つた”というより、行つたですが、西部のいろんなところを旅しました。いつも行つたのは、ユタ州のソルトレークシティです。ロッキー山脈は分水嶺になっていてそこに降つた雨が太平洋側に流れるか大西洋側に流れるかの境になっていて、そこちよつと西に入ったところです。

ソルトレークシティでレンタカーを借りまして、そこからだと西へ行くとネバタ州があり、ネバタを越えるとカリフォルニアがあり、それからアリゾナ、ニューメキシコ、テキサス、もうどこへでも行けるのですね。どこでもいつてもアメリカは広いですから、州をまたぐと丸一日、二日かかることはあります。町に着いたら電話帳でレザー(革)の項目を見てそれらしい店があればそこを訪ねて行つて、いろんな仕事場を見せてもらつたり、道具を見せてもらつたり、作り方を教わつたり。そういうことを2週間か二十日ほどかけての旅を何度も続けました。

私は、娘、息子と子供が3人いるのですが、一度大変なことがありました。いつも四輪駆動車をレンタルしてテントでずつと西部を回るわけですが、娘を連れて行つたときに、荒野の中に入っていったら川が流れていまして、浅ければそのまま行くのですが、これは行けないわと思ひ、バックしたときに路肩が崩れてしまつて2回転して横転事故を起こしたのです。娘が乗つていて、あつという間で、気がついたら逆さまでした。娘は「どうするの、お父さん、日本に帰れないじゃん」と。午後の2時くらいでした。



逆さまになっているものですから、四輪駆動車なので起こせばなんと  
か出られると思ったのですが、暑くて車体が手が触れないほど熱くて、  
これは困った、こんなことをしていたらいつか水も無くなると思い、私の  
リュックと娘のリュックに水だけ入れて街道筋まで約2時間歩いて出ま  
した。

助けを借りようと、車を待ちました。たまに車は通るんです。止め  
ようと思ってブレーキを踏んでくれるのですが、ぱっと見ると、なんだ

か日焼けした変なアジア人が子どもを連れているので、どう見ても怪  
しいと思うのか、誰も止まってくれなくて4、5台やり過ぎたと思っ  
ます。そうこうしているうちに向こうの方から車が来て止まったので、  
あれっと思つたら、アベックらしい人が橋の上から写真を撮ったりして  
いるのですよ。こんなチャンスは逃す手はないと思つて、思いっきり走つて  
そこに行きました。状況を説明しようと思つたのですが、向こうもあ  
まりにも変なのが来たのでびっくりして、どうしたのだろうと身構えて  
いるのですね。私も説明しようと思うのですが、全力疾走で来たもので  
すから息が荒れてしまい、全然しゃべれなくて、なんとか車が崖下に落  
ちてしまつて何ともならないので手を貸してもらえないかとやつと説明  
できました。

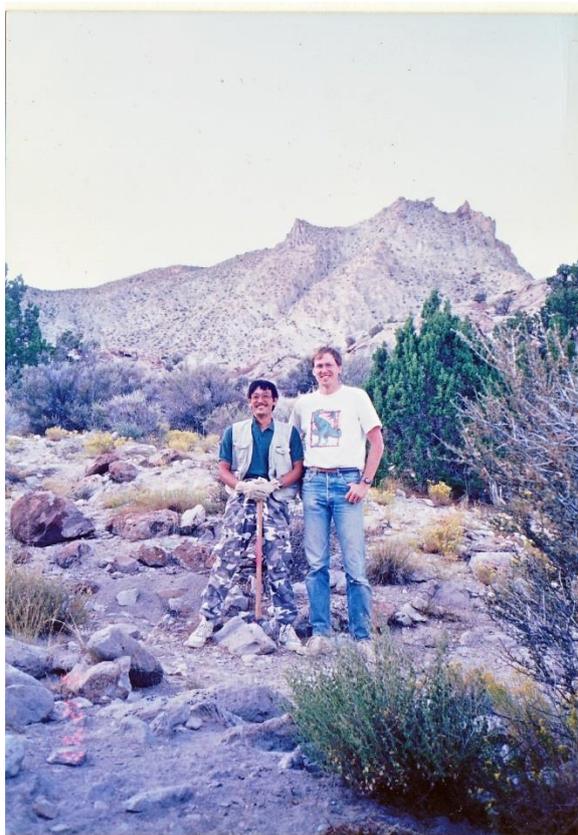
それではそこまで行くのかとなつて、車に乗せてもらおうかとなつた  
のですが、そのアベックというのが、アイダホのどこか遠いところからテ  
キサスまで引越しの最中で車の中は荷物でいっぱいなのです。私が入  
る余地もないほど一杯で、それでは荷物をなんとかするからとやつと  
私が入る隙間ができました。娘を膝に抱いて乗せてもらいました。幹線  
道路はいいのですが、脇道に入るともうでこぼこで、車の腹を擦ってし  
まうのです。それでそういうところに来ると、私と奥さんが下りて車  
を軽くし、そんなことを繰り返してやつと現場に着きました。すると、  
その人たちは「ウォー」とか言つて記念撮影をしているのです(笑)。えっ  
と思つたのですが、これは僕らではなんともしようがないので、とりあ  
えず隣の町まで連れて行つてあげるから、知り合いがいるならその人た

ちに頼むなり、或いは大使館に連絡するなりして、なんとかしないなさいとなりました。じゃーそうしますと、隣町まで連れて行ってくれたんですね。隣町といつてもたしか60キロほどあったと思います。小さな町だったのでモーターもひとつしかなくて、しかもそのモーターはインド人が経営している汚い古いモーターだったのですが、そこに泊めてもらって、遅かったので夫婦もそこに泊まりました。

私、アメリカ人に友人がいたので電話で、こうこうこうなつたと説明したのです。その友達の家からそこまで車で飛ばして8時間から9時間かかるのですが、すぐ出るといつてくれて、ノコギリや予備のオイルやガソリンや一式持つて来てくれました。その男というのは身長が190センチほどある大男で、二人で難なく起こしまして、まずオイルを入れてガソリンも入れて、エンジンを掛けたら一発でかかりましたね。そのときの写真は動揺していたのでないのですが、崖があつて灌木が続いていて、30メートルほど行くと道があつたので、その間の木を切つて無事脱出することができました。けれど、二回転したものですから「フロント」ガラスが全部割れちゃつて大変なことになつていたのですが、友達がレンタカー会社に電話してくれて、さすがアメリカですね、保険などがしつかりして、一番最寄りのところまで新車を持ってきてくれて、これで旅を続けてくれと事なきを得ました。娘には「これはお母さんに絶対言っちゃだめだよ」と言っていたのですが、帰ったら「お母さん、お母さん、大変だったのだよ」とすっかり暴露されてしまいました。

実はこの友達というのは日本で知り合つたのですが、一時アメリカの

古着が流行つた時期があつて、そういう古着を日本に持ってきて売る仕事をしていたのです。大学は地質学科を出ていて化石や岩石の採取が趣味で、実は私も小さいころ地質学者になりたくて化石や岩石集めが大好きだったものですから、それで意気投合しましてアメリカに行つたらいっしょによく化石採集や岩石採集をしていたのです。いまでも親交があります。



アメリカには多分10回以上行ったと思います。革を買ってその度に帰ってくるのですが、手荷物で帰ってくるのであるべく小さくして巻いてコンパクトにして日本に持ち帰ります。革だけでなく、ちよつとしたガラクタ、西部の人たちが使っていた拍車、ああいう古いものとか、いろんなものをビンテージショップで買って帰るものですから、入国審査の時に非常に怪しまれまして、「あんだ、こんなものを持っていくがピストルはもつてないだろうね」とか「ピストルは部品でもダメなだよ、ちよつと見させてもらうよ」と言つて、毎回、全部荷物を広げさせられました。お土産も、もちろん下着や身体も調べられて。そんなふうなものですから、妻はいつも迎えに着てくれたのですが、案内のあった便に搭乗していたお客さんがすべて出終わった後、小一時間ほどかかつて出ていくので、家内もしびれ切らしてぶんぶんで大変でした。税関では、その便の審査も終わつて税関の職員がみんな私のところによつてくるのです。新人研修の場みたいになつちやうのです(笑)。当然ですけど、汚れた下着も全部ばーと広げて、大変な思いをして革を輸入していました。アメリカから送れば良いのですが、関税で意外と料金をとられるので、そんなふうには苦労して手荷物で持ってきていました。

## スペインへ マカロニウエスタンのロケ現場

そんな苦労をしているときに、「アメリカも良いけれど、ヨーロッパの革もどう」と友達が薦めてくれました。スペインなんか面白いよという

ことで、たまたま私の知り合いの知り合いがスペインのグラナダの近くの山間に住んでいて、彼は僕らよりちよつと年上の、いわゆるヒッピー世代で、ヨーロッパを転々として最終的にスペインのグラナダ近郊に落ち着いたという変わった経歴の人でした。彼は、そこでフラメンコの衣装の会社を立ち上げて生活していたわけですが、その方を紹介してもらつてグラナダの面白い革をいろいろと手に入れることが出来ました。

革と言いますとイタリアが本場で、ドイツフランスにも伝統的にすばらしいのがいっぱいあるのですが、スペインというところと野暮ったさが残っているんですね。私は、かちつときれいなものよりもどこか大陸的な匂いのあるものが好きなものですから、例えばアメリカのものとかちよつと田舎くさいスペインのものとか、そういうのが好きなのでスペインを選んだのです。

そのフラメンコの会社をやつてる人と話をしている、実はぼくはマカロニウエスタンが好きでということになり、マカロニウエスタンがスペインで撮影されていたのは知っていたのですが、それがどこだということまでは知らなかつたのです。そしたら、「あれはこの近くで撮影されたのだよ、ぼくの友達もその近くで絵を描いていたのだけれど、誘われてマカロニウエスタンに出たよ」といわれ、これは聞き捨てならないことだと思ひ、その場所を教えてくださいと言つたら、グラナダから直線距離で約100キロだとのこと。グラナダの近くにシエラネバタというスペインで一番高い山があり、その山間(やまあい)に彼は住んでいて、そこからたつた「約100キロというのです。

これなら自転車で行けると。マウンテンバイクを借りまして行くことになったのですが、それはとんでもなくすさまじい山道で、すさまじいアップ・ダウンがあり、150キロくらいはあるのです。私当時39歳だったのですが、あまりにすさまじい道で、ドライアップといって干涸らびそうになって、それでもなんとか二日走って行くことができたのです。水筒と寝袋だけで着替えも全くなしで、二日間、ただロケ地の姿を見たい一心でひたすら走って、着いたときはふらふらで帰る日が迫っていたのですから、そこに一日ただけで友達の家に戻りました。同じ道を帰るのはばからしいので今度は地中海沿いにずっと走りました。途中であんまり長かったので、海水浴をしながら帰って行ったのですね(笑)。膝まで浸かる程度ですが。そしたら、街道筋を離れてみたら、ヌーティストビーチがあつてみなさん裸で泳いでいらつしやるのです。わたしはそんなことしたことなかったものですから、それでもなんか、これも楽しい良い思い出になるのでないかと、海岸に自転車を止めて。パスポートと大事な物だけは自分で分かるように砂の中に埋めて脱いで、みなさん裸だから多分大丈夫だろうと思つたのですが、さすがそういう経験がないものですから、なんとなくこう身体がかゆいような、へんだなど、もじもじもじもじしながら泳いだ覚えがあります。意外と気持ちが良いですね。それでけっこうやみつきになり、その地域に行くとヌーティストビーチに行つて裸で泳ぐようにしています。

スペインに行つて一日だけロケ地を探索したのですが、そのときに写真を何枚か撮つてきたのです。この二枚の写真のうち下が当時何も知ら

ずに撮つたものですが、ここがマカロニウエスタンの撮影の聖地なんて思つてもいけませんでしたから、テーパーパークくらい作つてやつていいのかと思つて帰つてきたのです。ところが映画で出てきた場面そのものだったのです。ホテルがここですし、踊り場の階段もあります。これを発見して、たまたま撮つた写真が当てはまるのだから他にもいくらでもあるに違いないと思ひまして、スペイン語ができる友達をそそのかしまして、最初に自転車で行つたのは1996年だったのですが、3年後の1999年には、その友達とレンタカーを借りて回つたのです。



## スペインのお祭り、トマティーニャ

その友達はマカロニウエスタンはどうでもいいのですからスペインに行くのなら、トマティーニャといまして、トマトの投げ合いみたいな変な祭りがあるのです、それに参加しようと言いました。ぼくは参加したくなかったのですが、それによしよに参加するという条件で行ったのです。トマティーニャってご存知ですか、単にトマトを投げ合うお祭り、大きな10トンくらいありそうなダンプカーで3台、どつと村に持ってきてそれを投げ合うのです。事前にどんなのか聞いていたので、わたしは水中眼鏡を持って行って、服なんかも脱がされてびりびりにされるので大丈夫なようにしていったのですが、Tシャツは破られ、たまに青い堅いのが混じっていてそれが当たるとめっちゃくちゃ痛いのです。耳の穴や鼻にとマトの種が入って地面はぐちゃぐちゃになってトマトの海が出来るのです。もったいないなと思うのですが、そのあたりはものすごくトマトがとれるのですよ。破棄するくらいなら遊んだほうが良いだろうと始まったお祭りなものですから、罪悪感はなかったのですが、面白かったです。が、二度とでたくない祭りでした。

## マカロニウエスタンのホームページで同好の士を得る

そんなことをやりながら2回目のスペインに行きまして、ある程度まとめてホームページを作りました。アメリカにはマカロニウエスタンの掲示

板があるので、そこにいつも投稿していたのですが、そこにこんなホームページを作りましたよと投稿したら、好きな人が各国に一人ずつくらいいるのですね。アメリカに一人、フランスに一人、ドイツは2、3人、イギリスも2、3人、肝心のイタリアにはほとんどいませんでした。スペインにも好きな人がいて。それで反響があつて、そこまで行ったのならここでここに行かないのかと先輩たちの意見をいただきまして、そんなことをしているうちに、とあるフランス人からメールをもらつて、そこに画像がいくつかあつたのですが、それはぼくがまだ行ったことのないバルセロナやマドリッド近郊のマカロニウエスタンに使われたセットの画像だったのです。マカロニウエスタンはアルメリア地方だけでなくバルセロナやマドリッドでも撮られたことが分かりまして、そこにいっしょに行かないかというお誘いを受けたのです。その方というのが若いころにパリで映写技師をしていたという人で独身なんです。現在65歳くらいですが、非常に巨体で、バルセロナまで車で迎えに行くからそこからマドリッド、南下してアルメリアに旅しないかと言ってきたのです。

いくら趣味がいっしょだといつても、フランス人の独身男性、しかも南フランスの人なのです。友達にこういう人と旅をするんだけれどもどう思う？と聞くと、南フランスで独身か、気をつけたほうがいいなと思う。なんにもないとは思えうけれどフランス語ではつきり断る、その言葉だけはしっかり覚えて行け、紙に書いて見せろと言われました。彼はいつもフランス語でメールをくれるので、私は英語に翻訳して読んでいます。彼は全く英語を使わないのです。私はフランス語が出来ないから

いつしよに旅しても大丈夫ですかと書いたら、大丈夫だ英語は少ししゃべれるからと言ってきたのでそれならと行くことになりました。

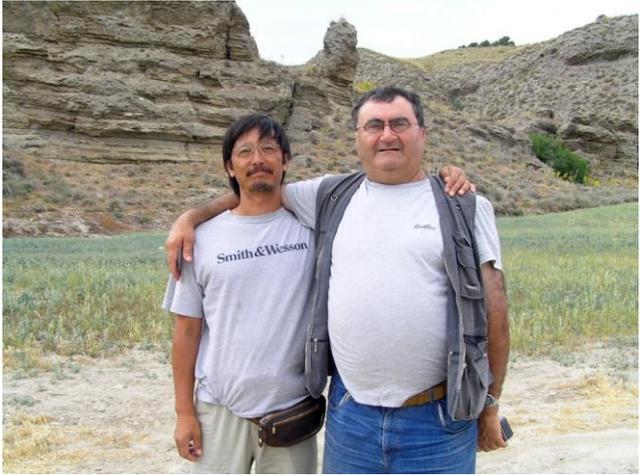
最初バルセロナの空港で会って英語で話しかけると、ここにこするばかりで何も話しかけてくれない。可笑しいなと思つて、私も英語はそんなにうまい方ではないのですが、これくらいなら通じるはずだと思つていたので、何回かするうちに彼は英語が全くしゃべれないのが分かったのです。2週間全く言葉が通じない人と男同士で小さなコンパクトカーの中でずっと回つていくことになるのか…困つたなと思つたのですが、夜襲されるとかそんな心配よりは、言葉が通じなくてどうしようと思つたのですが、共通の趣味を持つているものだから、意外と、なんとかなるものですね、ジェスチャーとかで。帰つてきてから、どうだったのかと思ひ出すと、2週間そんなに不便だったことが思ひ出せないくらい違和感がなくてビックリしたことがあります。

彼は非常に大きな人なのです。ミッシェルというのですが、大きすぎてシートベルトが自分でさせないので、おなかが邪魔で。だから、彼が助手席に乗り込んだら僕がさつと固定してあげなければいけない。それと、体臭がひどくて日本人では嗅いだことのないヨーロッパ特有の匂いで、本当に参りました。不思議なもので二、三日したら慣れてしまうのですね。彼は足が悪いものだから、巨体なものですから、山の上の方から、写真を撮るのは全部私の役で、そこに着くと、「ヨシ、この山登つてこつちの方向から写真を撮つてきてくれ」とか言うのです。

そんなことを繰り返していましたが、スペインは犬が非常に多いので

す。牧羊犬といつて羊飼いの犬ですが、牧場ではとてもたくさん犬を飼つていまして、あるとき丘の上から、映画のカメラはここにあつたのだろかなと思ひながら撮影していると、ワンと遠くのほうで犬が吠えたので振り返ると、大きなのがこちにやつてくるのが見えたのです。その声につられるようにして三方向から他の犬たちがいつせいに走ってくるのが見えたのです。車まで約200メートルはあつたと思うのですが、犬もそれくらいのところから走りだしたのです。私怖くなつてだつと走つたんですが、犬も走つてくるし、多分1秒も遅かつたらお尻でも噛まれたかも知れないほどでした。それを友達に面白がつて撮つた写真があります。帰国してから、彼が今回のなかで一番面白かつたことといつて写真を送つてきました。

結局彼とは約2週間の旅を4回しました。彼は若いときからスペインに通つて写真を撮つていたので、いろんな場所を知ることが出来ました。ただ、体臭がきついのと短気なところがあつて、私が助手席でナビゲーターとして地図を見ていると、ロータリーに来るとどこどこはこち、どこどこはこちと確認するのですが、普段から漢字しか見ていないのでヨーロッパの文字をばつと見ては分からぬ。それでどつちだと訊ねられても即答ができず、ロータリーをぐるぐる回ることが多々あつて、そのたびにすぐに叱られるのですよ。私もかつとなつてフランス語が出来ないので日本語で「うるせー、デブ」とか(笑)。むこうは「デブ?」。



### 往年の憧れの名女優に会う

さすがに疲れ切ったので、それから一人でレンタカーを借りて行くことにしました。次の年、アメリカの掲示板にこんなのを撮りましたよと載せたら、同好の士がいるものですから、それなら一度スペインに集まろうよとなりました。米国、ドイツ、北欧、オランダ、スペイン、イタリア、ヨーロッパの各国から一人ずつくらい、アジアは私一人だけでしたが、集まって、かつてロケがあった場所で同じような映画を撮ろうとな

りました。2004年、2005年とそれぞれ一本ずつ、映画を撮りました。それはさすが恥ずかしいので、ここには持つてきませんでしたが、なぜか西部劇なのに私は忍者の格好を出たりしています。

それ以降一人で行っても誰か声をかけてくれて現地で会ってちょこちよロケ地を巡るなんてことをしておりました。

2011年なんですけれど、ロケ地でウエスタンフェスティバルが開かれることになりまして、それは過去マカロニウエスタンにでていた俳優や監督やそういう人たちをゲストに迎えて、野外シアターでいっしょにマカロニウエスタンを楽しんでみんなで語り合おうという会で、それを知ったのは1年ほど前で、これは絶対行こうと思いました。ある方からメールをいただきました、もとマカロニウエスタンの女優さんがゲストとして行くとなりました。

話は前後しますが、中学校の時見た映画でインディアン役をした女優さんに一目惚れしまして、その方はイタリアの女優さんでニコレッタ・マキャベリーという名前の方で、君主論を書いたあのマキャベリーの直系の子孫の一人で、とてもインテリの女優さんで当時もはやされた方です。この方を大好きで、この方は1970年代の半ばで女優業を辞めてその後どうされたのか分からなかったのですが、インターネットをすればようになってこの人の名前を検索したら、アメリカのある大学の講師陣の中に写真を見つけまして、イタリア語とクッキングの講師をされていることが分かった。今では考えられないのですが、写真の下にメールアドレスがあったものですから、間違っていたらごめんなさいという書き

出しで、実はこういうことであたのことが大好きでした、いまでも好きで見えています、と熱烈なファンレターを送ったのです。

2, 3週間後に返事があつて、「実は私はあなたが探している人間です、よく見つけてくれました。わたしが一番輝いていたときのことを覚えていてくれてありがとう」というメールをいただきました。そのメールを読んだときに、もう死んでも良いというくらいに細胞がフル活性化しまして(笑)。

それから何回かメール交換していましたが、さすがに向こうも日本のだれか分からないやつと…となつて、季節の挨拶だけになつたのです。第一回のフェスティバルが2011年でそのとき久しぶりにメールが来て、「わたしはゲストスターとして呼ばれているから、あなた来ない？」と誘われたのです。最初から行く気ではあつたのですが、よし、それは格好つけて、あなたに苦労して会いに来ましたというところを見せようと、自転車で行つてやろうと思ひまして、自転車を分解して、日本からわざわざ自転車を持つて行きました。

マドリッドに着いてそこから高速列車にのつてアルメリアというところに行つて、そこで降りて自転車を組み立てるのですが、もともとアルメリアというところは漁村なのですが、水脈が発見されてマカロニウエスタが撮影されたところがトマト畑になつていて、全部温室になつたわけですが、その温室に对岸のアフリカからたくさんの方が出稼ぎに来ています、そのアルメリアの駅前には酒臭いちよつと怖いなという感じの黒人がたくさんいるのです。自転車を組み立てていると、ウイスキーの瓶

を持ったような人が周りに集まつてきてスペイン語でなにか話しかけてくるのです。何されるか分からないので、よつてきたら毅然と「わたしはスペイン語が出来ない」と、このスペインでぶち殺すというくらいの感じで言っていました。そして、組み立てた自転車で会場まで行きました。

会場はアルメリアから30キロほど内陸に入ったところで、緩い登り坂がずつと続いていて大変な思いをして自転車をこいでいきました。ロケ地エスから当然荒野で、道中とても暑いですよ。写真さすがにへたばつてしまつて、坂道で自転車を押して歩いていたら、イギリスから来た友達が車でちょうど通りかかつて、「ヨシ！」と、ぱぱぱと警笛を鳴らして止めてくれて無事車で行くことができました。そんなこんなでやつと会場に着きました。





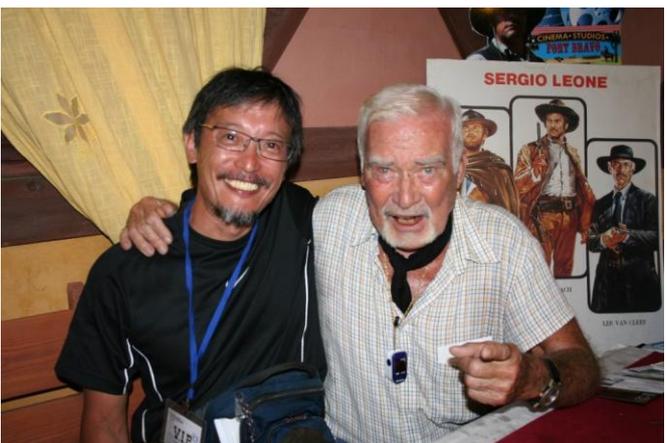
主催者に挨拶に行ったら「もしかして、あなたはスペインのロケ地のことをホームページに出しておられるヨシではありませんか」と言われ、「そうです」と言うと、「よく来てくれました」とVIP待遇にして貰えました。食べ物も飲み物も全部ただで良いよとなりました。やったという事でビールをしこたま飲みました(笑)。

彼女、さつきの女優さん、ニコレッタ・マキヤベリーさんですが、その方を待つていたのですが、その日の晩に現れました。「わたしはすっかりおばあちゃんになったからがっかりしないでね」と言われてはいたのですが、それでもきれいな方で、この方です(写真下)。そのときで70前でした。



もちろん、ハグしてもらってほつぺたにキスしてもらって、わたしは宇宙の果てまで飛んでいった気分でした(笑)。寿命が100年ほど延びたのではないかというほどのひとときでした。この方はマカロニウエスタンを一番たくさん撮った監督さん、この方はマカロニウエスタンの悪役の奥さんです。こういう当時の関係者といろいろ交じ合うことができて本当に感激の時でした。

この方は悪役なんですよ。悪役で鳴らしたおじいさんなんですが、このときは酸素吸入器を持って会場に来ておられて、非常によくしてもらいました。スペイン語しか話されないのですが、言っていることはだいたい分かって、この方はこうして写真を撮ってもらって二ヶ月後には亡くなられました。非常に良い写真を撮ってもらったと感激しました。



(フエスティバルの様子を撮ったビデオを見る)

これは夜のパーティーの様子でしたが、昼間は映画館でマカロニウエスタン

を延々と上映していました。わたしはこれまで死ぬほど見ていますので、興味がなく、ロケ地を見て回って、夜になるとここに戻ってきてビールを飲んでかつての俳優さんたちと談笑して、雰囲気を楽しんでいました。

さっきのビデオにも映っていましたが、この方はフアビオ・テステイというイタリアの俳優さんです。マカロニウエスタンの映画を野外でやっていると、この方も見ているのです。わたし、主演をしていた方の隣で見えて、本当に幸福この上ない感じでした。



## スペインのロケ地をスクーターで巡る

こんな感じで何回もスペインに行っていたのですが、さすが自転車も辛くなってきた、去年スクーター借りて行くことになりました。レンタルスクーターがとても安く、スペインは125ccから高速を走れて、日本のようにリミッターが付いていないので、日本製のを借りたのですが、日本のものとは比べものにならないような、あつという間に100キロで、すばらしいスクーターでした。1週間で1700キロほどテント生活をしながら走りました。レンタルバイク屋では舗装道路しか走ってはダメだよといわれていたのですが、80%くらいはそうでないところを走っていました。食べるものは、水とワインのほか、海産物、特にムール貝が非常においしいものだから、ムール貝とか鰯などをスーパーで買って、非常に安上がりでした。

こういう谷のどん詰まりでテントを張るわけですが、一回大変怖い思いをしました。ワインを飲んでひとしきり大声で歌を歌って気持ちよく寝たのですが、明け方の4時頃効いたこともない音で目が覚めました。それは鉄パイプを崖の上からがらがらと落としたりするような音で、自転車かバイクが崖の上から落ちてきたものとはかり思って、飛び起きたのですね。そんなものはあるわけないやだなーと思って懐中電灯を付けてテントの隙間からぬつーと覗いたら、たくさんの目が光ったのです。中腰だったのですが、思わず後ろに腰を落としてしまつて。何だつたかという、野生のカモシカでした。蹄が岩に当たる音がまるで金属が

当たるような音だったのでですね。非常に怖い、びびる思いをしました。



あと一回、こういうどん詰まりで寝ていて、朝起きたらタバコの匂いがふつと流れてきたのですね。わたし、タバコを吸っていたじきがあったものですから、タバコの匂いに非常に敏感で遠いところでタバコを擦っている人がいるとすぐ分かるのです。それで、これは誰か来るなと思っていたので、誰も来ないし、おかしいなとテントを片付けてスクーターで出発したら、迷彩の柄の網を被せた装甲車のようなものが止まっていたので、映画の撮影かなと写真を撮ったのです。少し行ったら、迷

彩服の兵隊がずらつと並んでいまして、わたしもビックリしましたがむこの兵隊もビックリしまして、上官が走ってきてなにかスペイン語でばっーとしやべるのです。「わたしスペイン語は分かりませんが、英語なら」と言ったら、上官は、「今日はこの地域を一日貸し切つて、一般人入り禁止の軍事演習がある。きみはその立て札を見なかったのか」。「全然知らない」。「どこからここに来たのか、この谷は調べたけれど誰もいないと聞いていたのだが」。「実は車では入れない一番奥でテントを張っていて今出てきました」。そう説明したら、「もう少し遅かったらきみはここから出られなかっただろう。直ちにここから出て行って欲しい」

兵隊がずらつと並んだところをスクーターで行こうと思うのですが、砂地なので思うように進んで行かないですね。足でけりながら行くのですが、兵隊を見ると、向こうは、なんだこいつは、というか顔をしている。すみません、すみません、と汗びっしょりになってたいへんな思いをして出ていったのですが、兵隊の中にもつこととして見ている人がいたのでそれだけが救いでした。

もし、起きるのが遅く出てくるのが遅かったら、演習は一日中どんどんやつていましたので、その日はその地域からでられないはめになっていただろうと思います。その近くで面白いロケ現場を見つけたのです。「エクスダス、神と王。グラディエイター」という、ローマのチャンバラ劇のセットが残っています、非常によく出来たセットなのです。表は、こんなのですが、裏に回ると、当然ですが、こんなふうになっています。映画つてすごいなと思ったのです。いまでも撮影が行われて、わたしが行ったと

きもチャンバラ映画を撮っていました。ローマ人の兵隊とか馬がいつぱい来ていました。



### 旅と創作意欲

わたし、年に一回行くようにしているのですが、こういうことをしていますと、どうでも良いことなのですが、次の創作意欲が湧くというか、好奇心が満たされて、それをもとにヒントに新しいものが作れていく。それで、なんとか家内に許しを得て行っている状態でございます。もし、アイデアが枯渇して売り上げが落ちていったら、絶対に行かせてもらえなくなるものですから、なんとか新しいものを吸収して良いものを作

つていきたいなと考えているところですよ。

これでわたしの旅の話を終えたいと思います。うまくしゃべれなくて申し訳ないと思つています。(拍手)

### 講演後の質疑応答

**早川** 最初の印象ですが、好きとはこういうことなのかということがとてもよく分かりました。極めつきのマカロニウエスタンファンというのを知りましたが、しかも、お母さんから継いだ二代目というか。それで質問ですが、なぜあれほど遠くまで革を求めてかなければならないのですか。その辺で売っているのを使つたのではダメなのですか。

### 革を求めて

**保田** それでいいですよ、いいですが、西部劇が好きでアメリカの空気を吸いたい、直にその土地に行つてみたいというのが最初にあつたのです。そこで売られている革には日本に入つていない革がたくさんあるものですから、行つて買つてくる物は日本では手に入らないものばかりでした。ネイティブの人が丹念になめしている革をわけていただいたり、そういう形で購入しています。スペインは山羊や羊が多いので、バリエーションが非常に多いですね。面白いものが作れるのではないかと思つて。例えば展示会をしたときに、「これはスペイン産の山羊です」とか「これは北米産

のバッファローです」とか、やっぱ博がつくでないですか(笑)。まあそういうこともあります。付加価値と付けることと自分の勉強のためと、それにかつても女優さんと会えることもあつて(笑)、足を運ぶようにしています。

**参加者A** われわれの知つている世代では、獣の皮を扱うのは汚れであると言われていたと思うのですが、革製品が一般に出回つたのはいつ頃からなのでしょう。

**保田** 江戸時代、身分制度として士農工商の下に位置された人たちがいまして、彼らの仕事が皮のなめしでした。人の嫌がる仕事を彼らにすべて押し付けてしまったことから、日本では一般に皮のなめしは忌み嫌われる仕事になつてしまいました。実際、革靴が一部の人たちによつて履かれたしたのは、明治になつてからです。革のバッグに関しても同じ時期だと思ひます。ただ、縄文時代の頃から、狩猟によつて得た獲物の皮をなめして革として利用していたのは、西洋だけに限らず、我が日本でも同じだったようです。衣服のみならず、狩に使う道具などの細工にも使われていたようですし、その後は武器として発展もしました。現在の剣道の道具などを見ても随所に鹿革などが使われていて、その強靱さゆえ、一般的に武器に使われたことは明確なようです。

### 西部劇のこと

**参加者B** 僕も西部劇が好きで見っていますが、棺桶を引っ張っていくの

がありました。あれは何という俳優さんで…

**保田** あれは「続荒野の用心棒」といまして、フランコ・ネロ主演、監督はセルジオ・コルブッチでフランコ・ネロの出世作です。

**参加者B** ああ、そうです。「続荒野の用心棒」というものの「荒野の用心棒」とは関係ない映画で…

**保田** そうです。

**参加者B** あれをテレビで初めて見たのです。

**保田** あれは衝撃的でした。

**参加者B** その次に見たのが「夕陽のガンマン」でした。それでお聞きしたいのですが、僕西部劇が好きになったのは、ピストルを撃つときのあの音など、バキューン…。それで西部劇が好きになられたのと革製品を作られているのどう関係しているのか、それをお聞きしたいので。

**保田** それを言うつもりでしたが、すっかり飛んでしまったのです、皆さまあまりに大勢いらっしゃるので(笑)。実はわたしの最初の革製品は、中学校の時の学生鞆を解体して作ったのが、ガンベルトだったのですよ。ガンベルトが最初なのです。ガンベルトばかり作っていました。それでは喰っていけないのが分かったので、カバンにしなければいかなんかということ。ガンベルトを作っていた技術を応用してカバンを作り始めました。今でもガンベルトは作っています。頼まれて作っています。

**参加者B** 好きな人はいるんですね。

**保田** いますね。最近、凝っている人がいまして1870年代に流行ったスタイルのものを付くって欲しいと頼まれたりするので。ですから、

わたしはアメリカに行ったときの資料をいっぱい持っているものですが、1860年代、1870年代ではピストルも違うので、資料を見て忠実に作っています。そのへんになると急に力が入るのです(笑)。モデルガンもうちには3,40丁あると思います。

**参加者B** 映画の話ですが、イーストウッドの何とも言えない台詞回し…あれは…

**保田** 英語のですね。

**参加者B** いや、僕日本語しか分からないので(爆笑)。

**保田** あれは山田康男という方、ルパン三世の吹き替えもやっている方です。イーストウッドと似たような感じですが、しゃべり方が。なんとなくけるような。彼は英語しかしゃべらないですから、イタリア語バージョンはイタリア人の吹き替えになっています。

**参加者B** 「夕陽のガンマン」のDVDを持っているのですが、英語バージョンと日本語バージョンの両方が入っているのですが、日本語バージョンを聞いていると途中で英語バージョンになったりするのですが。

**保田** ああ、それは日本でやっていたときの吹き替えを重ねてあるのですが、日本でやったときにカットされた部分があり、そのところは吹き替えが存在しないので、その部分だけ英語になったりします。日本のテレビでやっていたのは、1時間半枠とか2時間枠でやっていたので、カットされたところがあつたのです。コマーシャルが入るのでカットしないとおさまらないからです。そういうことは多々ありますね。

**早川** 非常に野暮なことを聞きますが、映画にはいろんな種類のがあ

りますね。SFとか恋愛ものとか。なぜそれほどまでに西部劇が好きなのかと。

**保田** DVDもたくさん持っていて、映画が好きですかと訊かれると好きですよと言いますが、恥ずかしくてそれくらいしか言ったことはないのですが、ほかのジャンルのものはないのですよ。イーストウッドの映画は好きでほかのジャンルでも見ますが、まずほかの見ないですね。最初にしゃべりましたが、自分の気がちっちゃくてダメだ、なんとかしてとすがりついたので西部劇で、それにいたく感銘したものですから、あとは西部劇というジャンルに恩返しをしなければいけないという気持ちから、このジャンルのものはすべて見ようと決めたのです。決めたと言うほど大げさのものではないですが、それしか興味がなくなつたのです、困つたことに。

### 現在の西部劇

**早川** いま、あまり西部劇は作られていないのでないですか。昔のものしかないから困るのではありませんか。

**保田** 困るのです、本当に困りますよ。アメリカではちよこちよこ作られるのですが、日本では封切られることが少ないのです。名古屋だと2、3日でもう東京に行ってしまうとか。でもDVDはすぐ出ますから見えますが、ヨーロッパ製はほとんど作られなくなつたですね。意外とフランスとかドイツとか、よく作っていたのですね。さつきマカロニウエスタンは

550本作られたと言いましたが、それはフランス製とドイツのを混ぜた値で、そのうちフランス製が30本、ドイツ製が50本くらいあつて、その他合作もありました。例えば、三船敏郎、チャールズ・ブロンソン、アラン・ドロンが出ていた「レッド・サン」はフランスと日本とスペインの合作です。あと、マカロニウエスタンに出た俳優では仲代達矢がいます。丹波哲郎もいますね。彼らはマカロニウエスタンに出ています。そんなこと知つていてもどうつてことないですが(笑)。

非常に寂しい気持ではありませんけれど、多分現在のイタリアでマカロニウエスタンを作つても同じようなものは出来ないと思いますね。当時の60年代のイタリア映画というのは、非常に精力的であつたとか、元気でした。マカロニウエスタンは、いわゆるネオリアリズムといわれた、たとえば「自転車泥棒」とか「鉄道員」とかのあとに台頭したジャンルでしたので、あの頃のような作品は作れないと思いますね。日本でマカロニウエスタンをまねして作つたのもあるのです。「スキヤキウエスタン・ジャンゴ」、あれが音楽はよくて、北島三郎の歌つた主題歌が非常によかつたですね。世界的はヒットしなくて、日本でもヒットしなくて、いまいちのうちじやないですか。終わつてしまいました。いま、若い人に西部劇とつてもぴんとこないんじゃないですか。

**参加者B** 西部劇というのは日本の映画でいえばどんなものですか、チャンバラのようなもの。

**保田** まあ時代劇ですね。南北戦争(1861年から1865年)の1860年代くらいから1900年初頭までの間を扱ったものが多いですね。



日本でいえば、江戸から明治にかけての時代です。実は、マカロニウエスタンで日本で作られた者が一作だけあるのですね。「ストレンジジャーインジャパン」という題名で、イタリア人スタッフが、琵琶湖のマキノつてありますね、あの辺で撮影されたものです。そういう面白い映画があるのですよ。それはアメリカのMCMの配給で作られたのですが、MCMは大きな会社ですが、ヒットしないのでないかとお蔵入りになったのです。つい最近、アメリカでDVDが生まれて見ました。あるガンマンが船で大阪に着いて、そこでちよつとした巻物を、これは財宝を記した巻物なのですが、それを巡ってチャンバラと拳銃とでやり合うという、珍妙なウエスタンといえ言える、非常に面白い映画です。日本の俳優は出ているのですが、当時の大部屋俳優ばかりで名前の分からない人ばかりなのですが。そんなものもあります。

## 革製品の販売

**参加者C** 革のお店をやられているのですね。

**保田** 店は特に構えていないのですよ。

**参加者C** そうすると、オーダーがあつて作られるのですか。

**保田** そうです、基本的には。作品を作つてギャラリーでの展示販売という形で、一ヶ月に一回くらいで、息子と二人で作つてるので数は作れるので、いろんなところで展示即売ということをやっています。そのときに、例えば、このワインボトルを入れるのはいかど注文してください、A4サイズの入るショルダーバックを作つてくれないかとオーダーを受けたりです。あとは、インターネットで、こういう大ききの者をお願いしますと注文が来たりします。

**参加者C** そういうときには西部劇の話をされるのですか。

**保田** したことないですね(笑)。まず、したことないです。ただ、わたしの工房の紹介のところには、少年のころから好きだった西部劇に感化されてこの道に入りましたとひとこと書いてあります。マカロニウエスタン好きが集まるマカロニウエスタン祭というのを東京でやったことがあります、そのときに呼ばれて話をしたことはありますが、そのときはフアンばかりですから、話は簡単だったのですが、今日はなるべく難しくならないようにいろいろ考えすぎたのが徒になったようで、本当に申し訳ございませんでした。

(ここで持つてこられた作品を会場に回す)

(けっこう重たいのがありますね)

**保田** 男性用のは重いです。

**保田** タグに書いてありますが、馬革であったり鹿革であったり、これはフクダですね。バツファローもあります。

(これは着色してあるのですか)

**保田** すべて着色してあります。着色は自分ですることはありますが、大概は色を指定して染め屋さんにも染めてもらいます。

(これはなかなかおしやれですね)

**保田** そうですね、アメリカのネイティブの人はそんな風に使っています。これは日本で駆除した鹿の角を送ってもらってそれを使っています。

## 革製品の手入れの仕方

**参加者D** 一つだけお聞きします。革製品に付いての話ですが、手入れはどのようにやれば良いのでしょうか。

**保田** 革は濡れても何ともないのですが、そのままにしておくとかビが生えてしまうので、特にこれからのような梅雨どきは、空気の通らないところに閉じ込めてしまうのはよくないので、いつも風の通るところに置いておくことと、あと、定期的には人間の皮膚と同じですから脂っ気が無くなるとアカギレを起すと同じ状態になりますので、油分を補給してやると。その油は特別なものでなくてもよくて、市販のハンドクリームなどで十分です。角っこや縫い目などに塗ってやればきれいにな

ります。わたしはオリブオイルを使うこともありますが、色の薄いものは色が濃くなるので気をつけて下さい。

**早川** どんどん注文が来て困るくらいですか。

**保田** おかげさまで、なぜか宣伝をしなくても注文は来ます。常に何か作っていない状態です。そうしないと工房としてやっていけないですけどね。

**早川** アフリカには行く予定はないのですか。

**保田** 実は知り合いから現地からいくつか送ってもらって見たことはあるのですが、確かに珍しい動物の皮はあるのですが、なめし技術に問題があつて、なんといいますが、モロッコも革は盛んなのですが、乾燥した地域でなめしたものは現地では匂わないのですが、日本に持ち帰ると一気に匂いが出てくるのです。湿度の関係で乾燥した地域のものとはなかなか日本では使えないですね。

## 鞣すとは

**早川** なめすというのはどういう作業なのですか。

**保田** なめすというのは、話し始めると一日かかりそうですが、皮にあるタンパク質を永久的に腐らないように処理することです。革偏に柔らかくするが「鞣す」です。生の皮は放っておくとかちかちになりますね。乾燥させると堅くなる、しかし水分があると腐ってくる。その腐らないようにするのが鞣すという作業で、鞣し方に大きく分けて2種

類あります。一つは、植物のタンニンを使う方法、もうひとつは化学薬品のクロムを使う方法です。うちが使っている革はすべてタンニンで鞣した革ですが、クロムを使う方法はドイツで開発された方法で、火に強よく水に濡れても堅くならない。例えば、ソファアの革、車のシートの革、服の革、これらはクロムで鞣したものです。昔のランドセルには独特に匂いがありましたね。あれは植物のタンニンで鞣したものです。

タンニンでなめされた革は、革くずを畑に入れても肥料になるけれど、クロムで鞣されたものは腐りもせずずっとそのまま残っちゃうのです。生態系に入り込めない。アメリカのネイティブの人はブレインタンといって髄液、脳みその液で鞣します。日本では菜種油に浸けて踏んだりこすったりして油分を入れていく鞣し方があります。

非常にたくさんさんの工程があつて、一枚の剥いだ皮を製品として売れるまでに植物で鞣す場合、一ヶ月くらいかかります。クロムで鞣す場合は三日か四日くらいです。だから、ほとんどが化学薬品で鞣されたものばかりですね。

**参加者 A** ここで使われている鹿の角はどこ鹿ですか。

**保田** エゾシカですね。

**参加者 A** ここの鹿の角とは雰囲気が違うなど思ったので。売っていますよ。名田庄産のも使ってください(笑)。

**保田** はい(笑)。

**安価者 E** いま革製品を見せていただきましたが、外国から注文があつて外国に出ていくことはありませんか。

**保田** あります。ただ、数えるほどしかありません。日本の物価で現地の物価に換算すると高い物になっちゃうのですね。当然送料もかかりますから。あんまり注文が入ると困るのです。いままで、アメリカだったりドイツに送ったこともあつたし、手渡したとドイツやスペインの友達にもあります。

## 創作、デッサン

**早川** これらの製品はデッサンしてから作るのですか。それともいきなり作っていくのですか。

**保田** わたしはデッサンをしないのですよ。頭の中で描いて。オーダーを受けて作る場合は形が決まっていますから、例えば、何センチかける何センチかける何センチと言われれば、その形に限定され、ある程度設計図を書いて作ります。作品展に出すようなものは革を広げて、そのときに頭の中にはこれならばこんな形なのかなと作り出します。いちおう型紙は作ります。残しておけば次に作るときに役に立ちますから。同じものを作るのは好きではないのですが。

**参加者 F** 前に見せてもらったもののなかに銃で穴の開いたのがありましたが。穴をそのまま利用したのが。

**保田** そうですね。北米などの場合、ハンティングで撃つて獲った皮をハンターが鞣し屋に売って、それが市場にでるので、そういうのを買ってきます。それで革に穴が開いているのですね。せっかくですので、穴にツギ

を当てたりそのままにして利用したりしています。あと、珍しかったのは、ある時牛革を買って、切ったら光っているのがいっぱい見えたのです。牛革って本来1センチくらいあるのですよ。それを用途に応じて薄くして使うのですが、1センチくらいの厚さの中にごま粒くらいのものがいっぱいあって、よく見たら鉛なのです。散弾銃の弾でした。散弾銃くらいでは牛は死にませんから、多分いたずらに撃つたのだと思います。そのまま使って、ショットガンリユックと命名しました。すぐ売れましたが。

革には傷がたくさんあるのです。虫には刺されますし、暴れ牛だったらすると傷だらけで、馬でもそうです。走り回っているのこの辺が傷だらけです。野生馬は特にそうです。それをごまかすために化粧して、つまり染めたりしたものが市場に出回っています。ですから、黒の革はわりと傷をごまかしているものが多いです。色が薄ければ薄いほどごまかしようがないので、品質が高いですね。

**早川** お買い物ヒントをいただきました(笑)。

**保田** 革製品を選ぶ場合、薄い色のほうが良いです。塗った色はだめですよ、塗りと染めとは違います。

**早川** 塗りと染めとは分かるのですか。

**保田** ぼくは塗ったものは使ったことがないのですが、いかにも塗りましただという感じがあらわれてくるのですよ。角っこが白くなるのは塗りのものですね。それはそれでしようがないのですが、染めの場合は染め直すことはできません。

**早川** 製品の大きさはだいたいこのくらいですか。小物はないのですか。

**保田** 小物は息子が作っています。わたしは小物が不得意で、たまに注文が入ると仕方なしに作っていましたが、息子はわたしと性格が全然違って、母親似で細かいものが大好きで小物は全部息子に作らせています。

**早川** 時間が来ましたので、残念ですがここで終わりたいと思います。ありがとうございます。拍手でお礼申し上げます(拍手)。

一・参加者(20名)

朝日年男、石田傳右衛門、石田ふじ子、植茶英男、大下新一  
小川宗一、小川キヨミ、小林宏子、治部ひろみ、辻徹、中塚好美  
中野英二、橋田国夫、早川博信、早川真理子、福本人司  
福本千枝子、藤川由起子、藤原義信、山口孝志

二・発言者(名)

- A(50代、男性)、
- B(60代、男性)
- C(50代、女性)
- D(70代、男性)
- E(40代、女性)